

	草地の達人	普通人
1 施肥時期 (早春施肥) (1番草刈取り後)	早い (5月上旬) (7月中旬)	遅い (5月中旬) (7月下旬～)
2 刈取り高	高い (9cm)	低い (5cm)
3 施肥量	草地ごとに設定	一律に設定
4 有機物施用 石灰散布	毎年散布	散布なし

図1 草地の達人と普通人の管理の違い

良い草地进行を維持するコツ!

1番草の高い収量や2回刈りの作業性などチモシーの魅力は尽きません。そんなチモシーと長く付き合うときの、ポイントを管内の事例で見ってみました。弟子屈町のある地域で調査したところ、8年以上植生を良好に維持する草地管理の達人は、普通人の人と比べ次の4つの取り組みに違いがありました(図1)。

① 施肥のタイミングが早い

チモシーの1番草の収穫後は、刈り取りから5〜10日に肥料を撒くことで、茎数を増やし収量を確保できます。逆に施肥が遅くなると、茎数の増加に反映しなくなってしまう。

巡回していると「2番草の収量は変わらない」との声を聞きます。ですが、1番草刈り取り後の追肥は2番草の茎数を増加させ、翌年の1番草の茎数を決定づけます。大事な1番草の収量を確保するため、バストタイプミングでの施肥を試してみませんか?

② 刈高が高い

地元の調査で一番草の刈高5cmと9cmと比較したところ、刈取り後とさらには翌年の一番草のチモシーの茎の分げつ本数が高刈(9cm)で多く、収量も多くなりました(図2)。また低刈りでは、翌年にチモシーが衰退し雑草が増えたのに対し、高刈は植生を維持しました(図3)。

チモシーの高刈りは、裸地の増加や雑草の侵入を防ぐのに有効です。ぜひ今年はモア

低刈(5cm) 高刈(9cm)



図2 1番草の刈取り高さによる2番草のチモシー分げつの違い

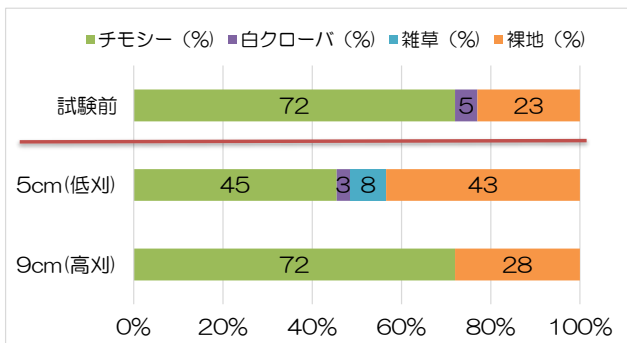


図3 1番草の刈取り高さによる翌年の植生の違い

③ 施肥量を草地ごとに設定

チモシーやオーチャードグラスなどの主要牧草ごと、またマメ科牧草の割合で、基準収量を得るための肥料の施肥量が異なります。

④ 石灰や堆肥を毎年散布

土壌分析と分析値に基づく施肥設計で、ほ場ごとの施肥量設定をお勧めします。

④ 石灰や堆肥を毎年散布

土壌のpHの低下は酸性肥料の施用や降雨により起こります。土壌中のpHが低いと、土壌中のリンの吸収低下・カルシウムとマグネシウムの不足・微生物活性の低下などが起こります(スラリーなど分解されにくくなります)。それを防ぐ方法は、タンカルの施用です。土層0〜5cmのpHが5.5〜6.0の場合、年間40kg/10aの散布で解決できます。また、堆肥の施用は、肥料や有機物の補給だけでなく、土壌の養分保持力を高め、詳しくは普及センターへ

コンにソリをつけたり、カッターバーの調節で少し高く刈ってみませんか?